

# 横浜歌人会 会報 113号



01 文学散歩・即詠歌会報告／詠草	後藤恵市、野一色容子、山本登志枝
04 観月歌会報告／詠草	高橋みずほ、宮下俊博
06 横浜いきつけの店 II	大久保晴雄、荒川とよ子、堀部知子
08 評論 人間の尊厳をはみ出すもの—介護の歌	鹿取未放
09 追悼 塩野崎宏 氏	千々和久幸、平野久美子
10 編集後記	

## 第5回文学散歩・即詠歌会報告／詠草

平成27年5月11日 寺家ふるさと村にて開催

詠草参加18名

### 寺家ふるさと村散策

後藤恵市

第5回文学散歩・即詠歌会は青葉区の寺家ふるさと村で、5月11日（月）に行われた。10時に田園都市線青葉台駅前に集合し、バスで「寺家ふるさと村」へ行き、同「四季の家・研修室」にて受付後、10時半頃から周辺を散策。

天気はほぼ快晴、新緑を亘ってくる風がとてもさわやかで、清々しい一日だった。

四季の家を出ると直ぐ、広大な田んぼが緩やかな傾斜を伴ってずっと続いている。その田んぼに沿いながら、水源の大池まで散策した。田んぼは良く区画整理されていて、水源の「大池」から傾斜により順次全ての田に水が供給されるとのこと。ただ残念ながらまだ田植え前で、風に靡く早苗を見ることはできなかった。しかたないので心の眼で楽しんだ。

田んぼに沿ってしばらく行くと「むじな池」という泥で濁った池に出会った。昔、貉が棲んでいたのだろうか。時折、泥水の下に蠢くものがある。あまり夕暮れには来たくないような池だったが、その畔に紫のアヤメが春の日ざしを浴びてキラキラ輝いていたのが心に残った。

さらに先に進むと「大池」に出会った。「むじな池」

と比べるとかなり大きな池で、水面ぎりぎりに何本も杭が打ち込まれていた。その杭の一本毎に大きな亀が一匹づつ甲羅干ししている。何か長閑でユーモラスな光景だが、亀にとっては深刻な領有権争いもあるのかも知れない。また、ひな鳥を連れて水面を泳いでいたカイツブリが突然水に潜り、どうしたのかと心配したが、暫くして水面に顔を出してひなに餌をやっていた。その池にはカエルもオタマジャクシもおり、周りの林には多くの野鳥も囀っていた。

散策を終え、12時までに研修室に戻って昼食をとり、散策で見聞した事項を一首にまとめ、午後1時までに係に提出した（詠草については、後記「平成二十七年度即詠歌会詠草」参照）。

1時半から後藤恵市の司会により、歌会を開始した。二次評者は小島熱子、佐波洋子、角宮悦子の三氏。詠草参加者が小人数だったこともあり、盛況な議論が続いた。歌会は四時前に終了し、参加者は心身共に心地よく疲れ帰途についた。



## 風ひかる

野一色容子

五月十一日、降水確率ゼロ、わずかに雲はあったが快晴。「寺家ふるさと村」(青葉区)での吟詠会である。風の快い爽やかな一日だった。

歌会の詠草にも「光降る」「風ひかる」「みどり野の」「万緑の」(以上、初句)等この時期ならではのフレーズが目立った。げに短歌は季節や天候に鋭敏な詩型である。

既製語に対する警戒感はだれしももっているが、「風ひかる」など既製語とはいえ大変魅力的だ。

## (大池)



既製語について次のような意見もあった。季節を感じさせる語句がたとえ常套句であっても、一首全体の中で相応の働きをしているならば、役目を果たしている。例えば、初句にさりげなく季節感のあるものを置くことで読み手を作者の世界へ誘導することも可能だ。初句から結句までぎっしりオリジナリティで埋め尽くさなくともよい、メリハリが大事なのだ、という意見である。私も同感する。

しかしながら既製語は、多くの場合、歌の鮮度を

一気に落とす。野外の即詠会なればこそ、つい既製の季語的なものに頼りがちだが、効果をよく見極めたいもの。私も家に帰って頭を冷やして推敲しよう。

「寺家ふるさと村」を隈なく見尽くす時間がなかったのは残念だった。その昔、自然発生的に開かれたであろう谷戸田を整備して、面積の広い田んぼが緩い段丘をなして下流に続いている。見た目に美しいが、人工的な感じがした。夏には蛍が見られるという。私が小学校を過ぎた町でも近所の町川で(蚊に食われながら)毎年蛍狩りをしたものだが、こんな人工的な場所で蛍狩りをする気にもなれない。

そう言いつつも、鳥が盛んに鳴いている山里は気がよかったし、湿地一面、誇らかに咲く真紫のヤマを見たり、重厚な水車が回っているのを見たり、草笛の名手に出会ったり、心が弾む一日だった。

歌人には野草や鳥に詳しい人が多い。真鍋氏にいたっては、プロが持つような望遠レンズを持って野鳥の写真を撮る気満々でやって来られた。重い機材をものともしない朗らかな真鍋氏は眩しかった。

この日の体験をなんとか作品にしたいと思いつつ散会した。興奮冷めやらぬままこれを記す。

## 寺家ふるさと村吟行会

山本登志枝

街並みも、駅も青葉台は瀟洒なところであった。電車が何かで遅れていたの、心配だったがなんとか全員集合して出発する。駅よりバスに乗り十何分

か、モダンな街並みを抜けると、寺家ふるさと村に着いた。広々と田圃が広がり、森がある。森の向こうは町田市ときき、寺家ふるさと村は横浜と東京との境界線上に在ることを知った。

そこで、各自一時間の散策をする。多くの人はむじな池に寄り、大池へのコースを歩いた。寺家ふるさと森を歩いた人、新池のそばの水車小屋まで足を運んだ人もいたようだ。

よく晴れた風の爽やかな日で、畦道を歩いていると、蛙の音がきこえる。ごく一部しか水はひかれていなかったの、水張田という心ひかれる光景にはあえなかったが、まわりの森からは、小綬鶏や、杜鵑の声もする。今回はじめて、画眉鳥に出会った。何か賑やかなところのある鳥で、外来の鳥であるという。

蛙の声をきき、葉影に鳥の姿を追い、池にオタマジャクシを見つけたりと、いつのまにかみんな童心にかえってわきあいあいと楽しく散策を続けた。

横浜歌人会には、鳥に、植物に詳しい人がいて、鳴き声から鳥の名前を覚えてもらったり、画眉鳥の由来をきいたり、春ジョオン、姫ジョオンの違いも知ることが出来た。

帰り道に、草笛を田の面に響かせている人がいて、草笛の吹き方を教えてもらった。地縛りの葉が吹きやすいそうで、なかなか難しかったが、一声響かせることが出来たときはうれしかった。

初夏の風のなかで、自然を満喫したあと、昼食をとり、いよいよ即詠歌会の始まりだ。同じところを歌っているので、一首一首から臨場感が伝わってくるのは楽しい。即詠なので、推敲が不



十分なだけ、いろいろ作歌上の問題のある歌が多い。文法のこと、言葉のこと、体言止めのことなど活発に意見を交換し合うことが出来た有意義な歌会だった。解散後駅の近くの

(話題になった画眉鳥)



平成二十七年 度 即詠歌会 詠草

- ・祖母が打ちわれらが食べにし鯉鮓うんどんは水車にてひきし黄金こがねの小麦 柴原明美
- ・大池のほとりに五本の杭ありて一本ごとに亀の甲羅干し 後藤恵市
- ・光降る寺家の谷戸田を渡れるは山ほととぎす祖おやの音色に 杉下幹雄
- ・風ひかる青葉台地をかりそめの遊び仲間と今日をたのしむ 角宮悦子
- ・紫の花の終はりし藤一樹蔓の垂りつつほのぼのけぶる 長崎厚子
- ・帰らんか 画眉鳥の声聞きたれば胸に目映ゆく夏の森牙ゆ 堀部知子
- ・みどり野の風に背中を押されつつ習ひ初めたる草笛を吹く 稲垣絃一
- ・大池の木影の浮巢をとび出して鳩の雛らはつたなく泳ぐ 佐波洋子
- ・おたまじやくしを遊ばせながら初夏の光の中のみぎわに蝦蟇は 山本登志枝
- ・木洩れ日の里山をゆく耳聴きききみづぎんの友に従き来て 野一色容子
- ・鳩の浮巢を守りし水は温みつつ明日は田起こす水となるらし 平野久美子
- ・石積みいしづみの側溝に降りこのま昼鴨はわづかな水に嘴はし差す 時本和子
- ・細道を草笛ふきつつ来るをとこ寺家ふるさと村初夏の日あふれ 小島熱子
- ・むじな池淀で水の動かぬを風がかすかに池面を揺らす 伊藤美枝
- ・森ふかく澱み濁れるむじな池赤き魚うせつと背みせて消ゆ 田代弥生
- ・万緑の木下に翁の手信号 高空に細き飛行雲のぶ 津波古勝子
- ・目にしるき水木の花のま白きが若葉の森に盛り上り咲く 塚田キヌエ
- ・水張田に浮草漁れる軽鴨か雌雄六羽が争ひもせず 真鍋正男



## 観月会報告／詠草

平成27年9月27日 東天紅ワシントン

ホテル24階店にて開催

詠草参加39名

### 同じ月と歌を心に

宮下俊博

まさに中秋の名月の9月27日。観月会が、東天

紅 桜木町ワシントンホテルで行われた。「雲がか

かっついて月ではないかな。でも何となく雲が薄く

なってきたみたい。」と不安と期待の入り混じった

なか、平野久美子代表の挨拶、8月にご逝去の塩野

崎宏氏への一分間の黙とう。そして、後藤恵市氏の

司会のもと歌会はテンポ良く進んでいった。入会早

々の私であったが、雰囲気はすぐにとけ込むことが

できた。平野代表の、フラットな座席決め、歌に關

することなら忌憚なく発言を、とのお話通り座席順

の一人一首の感想も、出詠歌を八首ごとに区切って

の第二評者の評や意見交換なども活発に行われた。

引き続きの懇親会でも、いろいろな立場の発言

のなかで歌に対する考えの違いが共有されていた。

また、真鍋氏の望遠カメラが呼び寄せたのか始まっ

て40分ほどの頃、待望の白く輝く月が雲から顔を

出し観月会の宴を少しずつ柔らかくみ帯びながら見

守っていた。参会者も歌に対する思いとともに、眼

やカメラを通して拡大された月と向き合い、心の中

に今日この日の同じ月を共有することができた。

さまざまな結社、異なる作風の人々の集まった観月会。表現は違っても、詩としての短歌。上代から続いている、日本人としての血、体温の感じられる短歌。現代に生きている人間としての思いや感性のある短歌。それら全部を一首の中に表現できるのだろうか、などと酔いと戯れながら家路についた。見上げるとほんの少し赤みを帯びた月が微笑んでいた。



(平野代表委員あいさつ)

### 宙の月影

高橋みずほ

横浜のみなとみらい地区を眼下に見て、今年も観月会が行われた。東窓から対岸の雲は厚く、中秋の名月を祈りながら始められた。

平野久美子代表委員の挨拶があり、後藤恵市氏の司会で歌会へと進む。四つの円卓を時計まわりに一



人ずつ批評し、その間、千々和久幸、新田由美子、中川佐和子、刈谷君代、小島熱子、杉下幹雄の六氏による二次批評。結社、時代による言葉の捉え方の違いはあるが、それぞれの立場からの個性豊かな発言があった。年々出席者が減少する傾向にあり寂しい限りだが、新会員の宮下俊博氏、鹿取未放氏が出席してくれた。出席者分の言葉の月と、じっくりと向き合える楽しいひとときだった。

ひとつも無き国にもあるか月影の訪ふ窓によりそひてをり  
杉下幹雄

歌会の間は、なかなか雲が途切れず気をもんだが、西日が射し込んでくると東の空にうつすらと青空がのぞいてきた。ごそごそと後のほうで真鍋正男氏が長い三脚を立てている。大きな望遠レンズで月を見るところ。みな、わくわくしながら月の出を待った。

菊膾胃の腑のなかにしづみゆき雨月の夜のほのか明かり  
山本登志枝

懇親会の中華料理が机の上でまわり出すころ、ベイブリッジの右のあたりの雲間から現れた。「見える」という声で、どっと窓に群れ、夜空を見上げた。望

平成二十七年 観月歌会詠草

遠レンズには、大きなレモン色の月。見えたとすぐに見えなくなる。昇る月を追いかけ、レンズをのぞいた。月のしずかな佇みと粹な計らいは、見つめて寄り添う心に忘れられない思い出となった。

二週間幾たび夜空を仰ぎしか月にも見放されたる男  
真鍋正男

宇宙という無限にいつも真向かっているから、ひょうひょうとした大らかさで、運を今日のためにもたらししてくれたのかもしれない。

連結を解かれ列車は西ひがし月をお供に別れてゆきぬ  
原 昌子

それぞれの心に焼きついた月をお土産に、今年の観月会はお開きとなった。同じときを過ごしながら、異なりもまたうちの輝きとなるようにと思いつつ…。

(スーパームーン)



亡き姉と難民小屋に枕並べ月のしずくに濡れていたりき  
津波古勝子

たりき

津波古勝子

神に向き素手と素足に祈るがのフラの踊りのなほも続けり  
平尾 眞

平尾 眞

「かぐや」とう愛しき名前の月探査機生れし地球に無事かえり来ぬ  
朝井恭子

朝井恭子

赤彦の三日月よりも尖りたる心にわれはわれを生きゆく  
荻谷君代

荻谷君代

暗闇の端から舐めてゆくやうに日ごと欠けゆく月よわたしよ  
中川宏子

中川宏子

西瓜ならば食べ具合よき形なり 長崎原爆祈念日の月  
稲垣紘一

稲垣紘一

ラマダンのナイルに眺めし満月は老い深む今宵のきらめくなぐさ  
河北笑子

河北笑子

ひとつも無き国にもあるか月影の訪ふ窓によりそひてをり  
杉下幹雄

杉下幹雄

ぬすつとが来いと指を曲げるよに月下の薄穂の木  
高橋みずほ

高橋みずほ

バス停へむすめを送る宵の道ブルームーンの明き光射す  
土屋美代子

かげ  
光射す

あか  
土屋美代子

満月は空に懸かりて人間の愚かさというをみつめてぞいむ  
野崎美智子

野崎美智子

なぜここに来てしまったの たかそらの月のひかりの照るみちを行く  
角宮悦子

角宮悦子

凍てし雪わだちの中につけり進むわれのツックに枯れ枝の月  
伊藤宏見

伊藤宏見

出窓より入りくる風のなつかしく涼しさわづかの月遅れ盆  
宮下俊博

宮下俊博

月光が机上の手紙を照らすとき文字はしづかにさやきはじめる  
小島熱子

小島熱子

「いらつしやい」幼子絵本を讀じてゴリラのパン屋の太き声出す  
藤田絹子

藤田絹子

黒格子の店に食みをり泥鰌鍋荷風もせしやと葱たかく盛る  
小川俊子

小川俊子

菊膾胃の腑のなかにしづみゆき雨月の夜のほのかな明かり  
山本登志枝

山本登志枝

ランドマークタワーの見ゆる丘にきて七月二度目の満月を待つ  
長谷川静枝

長谷川静枝

この夜は月光すると思つてゐる小さなことにこだわつてゐる

吉野裕之  
由比ヶ浜の渚をあゆむ鷗一羽海面に己が影をうつして  
竹内芳恵

ひたすらに語り合ひたきは亡き父母よ星空にての再会いつの日ならむ

中村規子  
母病める実家の宵を旅人のこころに淡き月を觀てゐる  
田代弥生

乗り換へることのめんだうながと終点までのたのしみもある

御園美津子  
コンビニで買ったおでんを手提げに凡庸な月眺めて帰る  
千々和久幸

魯田の畦を行きたり月光はわが引く影を淨めんとする

平野久美子  
驟雨きていきなり胸をつかまれる咬むにまかせて雨上がりを待つ  
新田由美子

古里の仲秋の名月仰ぎたき父母の墓参を無事に終へ来て

下田聰子  
役立たぬ涙も時にあたたかし泣くひとのそばに吾もなみだぐむ  
池谷しげみ

月球はただに静かに光りをり人住まざればたたかひもなく

高橋庚子  
夏の雨に濡れゆく若者呼ぶこゑを振り切るやうな背中の薄さ  
川井怜子

「10時よ」と言はれて目覚め寝坊すと思へど夜なり ゆめうつつなる

後藤恵市  
北国の蔦這う倉庫その上の白き満月のぼりつづけよ  
中川佐和子

アルファ・ケンタウリ思ひて沈むソファに来て草取り終へた母は罵る

鹿取未放  
月を覚え指さすこの児 汝がゆくて思へればあの月ほどとほい  
時本和子

茶会果て紋つき袴の青年が塵片しおり所作うつくしく

渡辺礼比子  
連結を解かれ列車は西ひがし月をお供に別れてゆきぬ  
原昌子

内戦の祖国脱出するボート渡りきるべし月下の海を

高尾文子  
二週間幾たび夜空を仰ぎしか月にも見放されたる  
真鍋正男

## 横浜◎行きつけの店 Ⅱ

カラクリ時計のパンヤさん

大久保晴雄

娘が小学校から走つて帰ってきた。「パパの散歩の道にカラクリ時計っていうパンヤができたんだって」目を丸くしている。こうなると、いくしかない。散歩道は青葉区美しが丘西の旧地名、保木(ほうぎ)の生産緑地一帯の丘である。丘の下の蓬谷戸の小道の入口近くに、パンヤができていた。

高原の背の高い小屋ふうのつくりだが、時計は見あたらない。店に入って見回すと、レジの真上の高みに時計がかけてある。よく見ると、宮崎作品のトロの顔を型どつていた。女性スタッフの一人が娘にニコニコと、棚の一つを指さした。棚にはチョコレートに包まれた直径十センチほどの、丸いパンが並んでいる。表面には、白砂糖の輪の目が二つつけてある。みな表情が違う。いまにもとびだしそうだ。「まっくろくろすけはね、夏になると休眠するの」スタッフの方は、ほのぼのと娘に話しかけた。奥様がパンの名づけの原案をつくるそうだ。「あんぐり・アイ・林檎とリンゴのヒソヒソ話・窓から覗くのダアレ」等ファンタジックで楽しめる。『五穀あんぱん』等の日本伝統食材のパン類も、でんとある。固めの

小さなフランスパンも好みだ。

以来、私の散歩コースの一つには、カラクリ時計のパンヤさんが加わった。結婚してもヨコハマを離れたがらない娘は、白楽に住んでいる。あしたはカラクリコースだよとメールを送ると、すぐにくる。テラスの丸木の椅子に腰かけて中身もびっしりチョコレートの『まっくろくろすけ』ともう一個のパンを、時をかけて食べる。サービスのコーヒーを頂く。カラクリ時計のパンには、青空と白い雲が似あっている。

ところで『カラクリ時計』とは、中国の『臨済録』のカラクリ人形の説による、と店主は語る。自分も人様の手によって働かせて頂いている、そのことへの感謝と謙虚さを大切にすることが商いの道だと、する。なるほど、味わい深いパンやさんたるゆえんが、解される。

### ジャパンシヨップ

荒川とよ子

すぎ去った日々へ逢へるやうな気のある店。それはさうデパートの六階の少し奥まつ所のジャパンシヨップです。この店はデパートが横浜に開店と同時にずっと続いてあります。ここには昔から親しみ愛されて来た伝統工芸品が所狭しと飾り付けてあり思はず足を止めてしまひます。まずは京人形の数々、高砂人形、兜に眼がゆく。ゆつくりと歩を進めて明

治、大正、昭和を思ひ合はせる遊具のおはじき、面子<sup>めんこ</sup>、手毬、ビー玉、独楽、拳玉等をそつと手に触れてみると幼い頃の友の笑顔が浮かび、ひとときのタイムスリップ。次の売場は畳表を敷いた東下駄です。いつも余所行きに履いてみた<sup>は</sup>妣を思ひ出します。この東下駄はよく売れてゐるさうです。そして次に目についたのは赤い無地の蛇の目傘ですが、元禄時代から大衆に使用されてきたやうです。蛇の目といふ名が面白いので聞いてみると傘の中心部と周辺を赤や紺などに塗り、その間を白くして蛇の目の形に見えるので蛇の目傘と言ふさうです。

折からさう美術館で歌川国芳浮世絵展が開催されてをり、浮世絵を染め上げた手拭ひや暖簾<sup>のれん</sup>も展示販売されておました。

店員さんも気さくな方です。この店は外国人もたくさん見え浴衣等を買つて行くので、日本人向けの寸法と外人向けの寸法の浴衣や着物など用意しておく<sup>と聞いてをります</sup>。

棚の上にあつたミニ飾り屏風(縦十六センチ、横十三センチ)の蒔絵が気に入り手に取つて見ると、表面は枝垂れ桜が描かれ裏面は黒漆りで二曲になつてゐる。早速購入することに決め、我乍ら良い買物をしたと心を弾ませてみた。現代になつて生活様式も洋風に変りつつあるなかで日本独自の工芸品や和風雑貨の店はきはめて大切だと思ひます。

古い時代のものが目新しく思ひ見ることが出来る

ジャパンシヨップはさうデパートへ来た時は必ず寄つてみたい店です。

### わが街洋光台

堀部知子

磯子区の洋光台に移り住んで42年が経つ。日本住宅公団は、横浜国際港都建設計画により昭和39年から洋光台の建設は開始され、計画人口は3万3千人であつたと聞いている。開発前起伏の激しい丘陵地帯に、戸建て住宅と中高層の集合住宅ができ、比較的緑豊かな住環境の街となつた。昭和45年3月に根岸線の磯子から洋光台間が開通し、48年4月には大船まで延長された。隣接の港南区の港南台駅前には高島屋ができ、わが家から徒歩30分弱の距離で、ウォーキングには良く、買物はなくとも地下から五階まで時間があれば巡ることもある。文具は扱っていないので、隣接の「バーズ」の浜書房へ、ここは本は勿論のこと文具・雑貨など豊富で楽しい。この「バーズ」は飲食店も数有り、ランチタイムは割合賑わつてゐると聞く。近くには映画館があり、バスターミナルがあり、活気のある駅周辺である。わが街洋光台の駅周辺はイトーヨーカ堂をはじめ他に三つのスーパーと生協があるので日常の買物には事欠かなく便利である。

私はよく小さなカメラを持ち歩き、季節の花々や樹々の紅葉、めずらしい建物等を撮つてゐるので、

アルバムはかなりの冊数になった。時には北鎌倉の円覚寺、横浜三溪園、みなとみらい地区などをカメラと共に歩く。

洋光台駅前の〈サンモール洋光台〉商店街の植田写真機店は行きつけの店である。その時々撮ったフィルムをこの店に持ち込む。家族写真、証明写真、集合写真（小中学校の入学、卒業写真）等手広く扱っている。私共の短歌会の創刊20周年記念の全国大会を横浜のホテル“メルパルク”で行った折に、ホテルまで出張してもらった昔のことを思い出した。又、サンモール商店街の広場ではいろいろなイベントがあり、プロレス、コンサート、ハワイアン、地域の小学生のコーラス等等。葬祭用品や葬儀関係の相談等もできるらしい。珈琲と新茶の線香を私は買求めてきた。

### ◆◆◆◆◆ 人間の尊厳をはみ出すもの——介護の歌

鹿取未放

現在多くの人が親の介護問題に直面している。今後老人が爆発的に増えるそうだから、介護はますます身近で切実な問題となるだろう。その時、介護をどう詠うかは重要な課題である。この小論では介護の歌は現在どう詠まれているか、そのさまざまありようを考察してみたい。

かつて斎藤史は「我を生みしはこの鳥骸のごときものかさればよ生れしことに黙す」と詠んだ。知性に溢れて澁刺としていた母が鳥の骸のような〈もの〉になりはてた嘆きと哀しみが込められている。もつと端的に「老不気味 わがははそは人間以下のえたいの知れぬものとなりゆく」とも詠んでいる。

わたくしを産みたる洞が口あくを見るは苦しき摘便のたび  
中原千絵子

中原の歌は具体的な介護の場面を詠んでいる。医師である中原は医療用語「摘便」を使うが、便を指で取り出す行為そのものではなく、その折々に見える自分を産み出した〈洞〉にたじろいでいる。斎藤と中原では切り口は違うが、二人ながら己れの命を産み出したものの変質を目の当たりにし、肅然として黙り込む。そして命の果ての老いの無惨を通して命の本質とは何か、深く思いを致すのであろう。

おもらしの後は黙禱するように壁に向かい  
てうなだれる父  
藤島秀憲

縁側の日差しの中に椎茸と父仰向けに乾き  
つつあり  
冬のうんち春のうんちと介助して壊れそうな君の尻をぬぐいつ  
渡辺松男  
生きていくれとしんそ願うとき君あたたかきうんちをもらす

中原と似た介護の場面を、男性である藤島と渡辺

は別の角度から詠っている。藤島の一首めは、父が自分の心身の不如意を恥じている様を「黙禱するよう」に「諧謔はあるものの優しい視線で捉えている。二首めはユーモアの中に厳しい介護の現実を溶かし込む。父の老いの現実を直視することは耐え難く、日々の介護は心身ともに消耗する。対象と距離をとりユーモアでくるんで詠うことで、藤島はやつと自分を救うことができたのだろう。

渡辺は親ではなく妻を介護しているのだが、「冬の」「春の」とあるところから数ヶ月に渡って介護が続いていることが分かる。自分の全存在を傾けて妻のうんちを介助する姿のみが描かれ、歌は優しい品格にみちている。さらに二首めに詠われる「うんち」は妻の暖かい命そのものである。

しかし、ここで介護やその詠い方に性差があると云っているのではない。それぞれの感受の差であり、大きくは「歌」をどう捉えているかの違いであろう。さらにそのような直接的な世話だけが介護の歌の範疇でもない。

母の顎にしろく伸びたる毛を抜きぬ毛抜き  
の先にくと力込め  
中津昌子

中津の歌は、人間の尊厳をはみだすように母の顎に生えた白い毛を力を入れて引き抜く様子を描く。ひよろりと伸びた一本の髭を仇でもあるかのように力を込めて抜くところが、おかしくて哀しい。渾身の力で、母を人間の尊厳の世界に呼び戻すかのよう



である。

ぬくみのこるパジャマ・老斑・杖・お粥

かなしい順にまるつけなさい 日高堯子

春の月竹群ゆらしのぼれども歯をはづし目

をつむり父はもう寝た

日高の一首めは直接の介護を詠ってはいないが、日々老人と接していることは並べた事物によつて分かる。「パジャマ・老斑・杖・お粥」がどれもかなしいと結ぶのが一般的な詠い方だろうが、日高は「かなしい順にまるつけなさい」と読者を歌の中に引き込んでいく。あげられたどの語も温く湿り気を帯びて、背後に老いた親の息づかいがなまなまと立ち上がってくる。二首めは厳しい老いの現実だが、何もかも削ぎ落として素となった父も、家の外の竹群も共に春の月が荘厳しているような印象を受ける。二首とも大柄でひろがりがある詠い方だ。

紙数の関係上、俯瞰にはほど遠い少数の引用になつたが、介護の歌の幅を広げていると思われる歌をあげてみた。それぞれ詠風が違い、老いへの迫り方切り口も違うが、いずれも生の本質に迫る優れた歌である。介護の歌はうんちを詠って崇高な歌もあるし、たった一本の髭を詠むことでも可能なのだ。



追悼 塩野崎 宏氏

泰然自若―見事な人生の幕引き

千々和久幸

〈泰然自若、通夜の席で塩野崎さんの遺影を拝しながら、ふとそんな思いが過ぎった。組織のリーダーとして頭に頂いて、塩野崎さんほど花と包容力ある人は居なかった。豊かな学殖と大らかな人柄がそう感じさせたのであろう。〉

その輝かしい足跡は長く語り継がれるだろうし、現世で為すべきことはすべて為し遂げた上での、見事な昇天であった。患うことも他人に看取られることもなく、たった一人で突如逝ってしまった。まことに男らしい最後であった。

横浜歌人会でのわたしは、大先輩の塩野崎さんと戦うことで、人生の大事な何かを教えられた気がする。発端は「病める組織を蘇生させよ―横浜歌人会への手紙」(横浜歌人会会報NO・94)、2009年1月20日)というエッセイからであった。わたしはその中でこう書いたのだった。

「・・・研鑽の場にしては熱気が乏しく、顔見知りか同世代だけが個別に交流する仲良しクラブだった。(中略)組織としての目的意識の希薄さ、低さが会を微温化し、組織の活力を奪っているのだ(略)

リーダーにいま少しの勇気があれば、横浜歌人会は蘇生に向けて新たな歩みを始めるだろう」と。

これは明らかに当時の代表委員であった塩野崎さんへの挑発であった。ところが、塩野崎さんは、この生意気な提言を丸呑みしてくれたのである。或る日突然、わたしは塩野崎さんの訪問を受けた。話しをしたいからぜひ時間を作ってくれ、というのである。用件というのはわたしが代表委員を降りるから、後を引き受けてくれという懇請いや説得であった。

こんな経緯があつてわたしは2010年(平成22年)1月の総会で代表委員を引き受ける羽目になった。運営には塩野崎さんのお力をお借りしたことは言う迄もない。新体制がここまで来ることが出来たのは、塩野崎さんの度量の広さと出所進退の潔さに負っている。後に塩野崎さんは神奈川県歌人会会長も歴任され、いよいよその〈泰然自若〉ぶりに深みと渋み加わる矢先であった。享年86歳、若いとは言えないが、人間的な輝きはこれからという矢先、まことに見事な人生の幕引きであった。合掌。

### 塩野崎さんの声

平野久美子

塩野崎さんは私が入会して程なく、横浜歌人会の代表に就かれた。歌人会に入会するまで、私は塩野崎さんを存じ上げず、数年後に運営委員になって初めてお話しをした。

塩野崎宏様 謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

塩野崎宏 氏 十首選 (佐久間裕子選)

二日月水平線をやや上り漁火は日本の方角へ動く

メキシコの風船賣りは軍帽を冠りてひげの中より笑まふ

モラを縫うクナの女ら日だまりの砂地に坐り顔を向けざり

アームストロングの囁き聞え月面に立つ人影は映像となる

冬近み妻と吾との生活を十年という單位に確かむ

夕光は赤しといへる兒の指のかなたの雲に陽は沈みゆく

近眼鏡を外しあるまま地下道を出でぬ異動の案まとまらず

MM線終点に月二度来り谷戸橋渡る何代目かの橋

この街に歌碑五指に余るその中に最大なるが弁玉を讀ふ

西洋の古き街に欠かさぬ宿の名ぞニュー・グラント郷愁の源泉なり

副読本に学びて今に記憶せり露の葉の下に住むコロポックル

編集後記

・本年の文学散歩・即詠歌会は平成27年5月11日に寺家ふるさと村にて開催されました。詠草参加は18名でした。

・本年の観月会は平成27年9月27日に東天紅ワシントンホテル店にて開催されました。詠草参加は39名でした。

・会員の皆様で、歌集を上梓された方は、自選10首と説明文(23字×28行)を左記後藤あてお送りください。会報に掲載させていただきます。

・本年8月に私達を長くご指導して頂いた元横浜歌人会代表委員、塩野崎宏氏が逝去されました。慎んで御冥福をお祈り申し上げます。

千々和久幸、平野久美子両氏に追悼文をお願いしました。

・振替口座(郵便局)は左記の通りです。

06230-052137 名義 横浜歌人会

発行日 平成二十七年十月二十三日

発行人 横浜歌人会 代表 平野久美子

〒245-0066 戸塚区俣野町

1403-11-206

編集人 後藤恵市

〒236-0046 金沢区金利谷西1-46-6

Tel・fax 782-8778

e-mail kg4238@jcmnet.jp



いつの歌会かは忘れたが、塩野崎さんの一首の中に「ヘリコ飛ぶ」との言葉があり、思わず「ヘリコつてヘリコプターですか?」と問うと、「エッ、ヘリコつて言わない?」「ヘリとは言ったりしますが」「ああ、そう、ヘリコ飛ばすってよく使うんだよ」と笑顔。何となく報道関係の言葉のようだった。塩野崎さんがNHKに長く勤められたこと、アポロが月面着陸の瞬間、NASAで仕事をされていた事なども、その一瞬の感動を詠んだ歌によって教えられた。

運営委員会はいつも穏やかで、例年通りの進行で運ばれたが、誰もが「それはちよつと難しそう」と思う事が起きた。誰が担当するか決まらない。その時実にさりげなく「私がしましょう」と塩野崎さんが引受けて下さった。静かだにこやかな代表のきつぱりした声に、初めて塩野崎さんの人柄の大きさを教えられた。本当に周囲が困った時、手があげられる人が塩野崎さんだった。会う時はいつも「ヨッ、元氣?」「今日も元氣そうだねエ」と声をかけて下さる。「他に取柄もなく、、、」と私が笑うと、「いいねエそれが一番!」と言って下さった。あの無敵な笑顔と人柄そのままの豊かな声をもう聞く事はできない。